



理事会だより (7・13)

一、令和五年度小田原秋季俳句大会(十月十五日)について

①小田原市から市長賞・市議会議長賞が提供されることになり、市長、議長への大会出席を申請中

②本日現在の投句は五八名八八組(以上事業部)

③大会当日の役割分担は八月理事会にて。(総務部)

二、秋の吟行会は十一月一日(水)に大雄山最乗寺にて実施することで細目検討中、八月理事会で決定し九月号協会報にて告知する。(会計部)

三、その他 けやきロッカーの整理を実施。来年度はUMECOロッカーを借りて大会用品を保管することにした。(総務部)

理事会日程

8 / 10、9 / 14、10 / 12
(毎月第2木曜日 けやき15時より)

「俳句おだわら」10句抄 (671号より)

佐々木重満 抄出

四君子の墨の濃淡風光る

波しぶき礁にはじけ山桜

春の宵「母さんお風呂沸きました」

新しき地下足袋一歩春の土

チューリップ小さな秘密抱へをり

葉桜となりて無口の並木かな

香水瓶縁なく父は生きにけり

雉走る担い手のなき田や畑

千手観音腕いそがしい畑

緑雨きて介護に仏鬼も棲む

須田聡子 抄出

持ち歩く大き封筒竹の秋

桜散り頑固な男の樹となりし

チューリップ小さな秘密抱へをり

したたかに生きて酒匂川の野藤かな

葉桜となりて無口の並木かな

手鉋に組板香る半夏かな

朝刊の束モンゴルの黄砂かな

春蘭の森は母体の温みもつ

藤咲くや背にごつりと床柱

緑雨きて介護に仏鬼も棲む

近藤 久江

神山つとむ

加藤れい子

久保寺トミ子

武居裕美子

高橋みどり

村場 十五

一ノ瀬茂代

大石 和子

大佐田うづき

竹下由里子

市川めぐみ

武居裕美子

宮崎 悦女

高橋みどり

庄司 下載

米山 翠

木村 和彦

杉崎 せつ

大佐田うづき

俳句おだわら（7・19メ切り、到着順）

◆小田原鹿火屋（6・23）

久江報

溪流の小石舞台のかじか笛

足立 和子

梅雨晴や牧野凶鑑の分厚きへ

川本 育子

はにかみし紅さす小梅掌に

高橋 小糸

梅雨晴間鋭き声放つ白孔雀

山崎 悦子

梅雨晴間峰にまた峰の八ヶ岳

近藤 久江

◆山北（6・22）

由里子報

古民家の玄関先に麦藁帽

和田恵美子

古典臨書の墨の濃淡菖蒲園

尾崎 幸子

古書店のガラスの引き戸梅雨曇

星 一義

古墳より彼方のビルや青嵐

石田加津子

茅花流し期限切れなる吉野葛

竹下由里子

◆たけのこ（7・5）

悦女報

梅雨じめりちちのノートを讀みふける

三木 泰子

青田風幼犬走る婆々走る

小宮 早苗

万緑にさざ波のみの湖畔かな

久津間百合子

駅薄暑人待つ電光ニユースかな

宮崎 悦女

◆香雨・梅ごち（6・24）

忠山報

梅雨晴や家族の数の傘を干す

肥後ちさこ

朝あけの空ふるはせて草刈機 関戸わよこ

若葉風峠を越せばまた峠 青山 典子

青空を隅に追ひやる雲の峰 門松 鳳文

梅を干すひと粒づつに日の匂ひ 吉田 百代

夏燕迷ふことなどなきごとく 吉田 康雄

照りつける雨後の太陽沖繩忌 陌間みどり

ジャズミシヤひとりおしゃれを楽しむ夜 小澤 純子

村の空ゆすりて梅を落としけり 池田 忠山

◆こよろぎ（7・13）

つとむ報

六月のきらりと光る薬指 高杉掘三朗

友と行く山寺つつむ蝉の声 板谷 雅泉

新じゃがをほつこり煮つめ雨ごもり 植松テル子

白南風や今際いまわの息の和らぎて 神山つとむ

◆春野（6・18）

きよ志報

羅漢仏に悪相一つ竹煮草 秋山 昇

くしやくしやのハンカチ涙色の空 伊藤はる子

噴水の自律神経乱れしか 内田知江子

三里には灸を卯の花腐しかな 尾崎 一夫

心地好き疲れとなりぬ冷し酒 瀬戸 悠

退院や緑の風に目を閉ちて 二見 和江

採血の後の昂り遠花火 長谷川きよ志

◆沈丁(7・6)

寶子山報

塾通ひ一服したいな青蛙

田中 幸子

早苗田の朝日に映ゆる雲の彩

若村 京子

夕顔を植えてやさしくなる垣根

かほる報

市川めぐみ

老鷺や朝餉の卵こがしをり

柳澤ミサ子

浜風やうなぎ屋の文字活きており

豊田 幸枝

ころころと笑ふ生徒の氷とけ

田中 恵一

ようやくに座の静まりて夏料理

斉藤 静

赤青黄部活帰りのかき氷

河本 純子

すずらんや介護の女のやさしくて

小瀬村信子

かき氷溶けペンギンは空を飛ぶ

瀧本 敦子

暮れてなお緋目高たちのまだ遊ぶ

柳川 紀枝

歩き方十人十色梅雨の傘

勝木 澄子

緋目高や今産卵のファンタジー

加藤 富江

領づきてまた一匙のみぞれかな

菅野 英余

雨続くめだかの学校休校日

加藤れい子

幸せの御裾分けせしさくらんぼ

高井 幸子

手拭いの中に跳ねたる目高かな

加藤 健治

AIに任す世相や梅雨寒し

片野 節子

蚊を一つ打ちて夜中のVサイン

加藤かほる

氷レモンシヤリシヤリ音の乱反射

峯尾ユキエ

◆実のり(7・12)

たか志報

ランナーにわたす氷や夏の風

清水美代子

夕焼や異国の和平祈りつつ

岩本ひさみ

退院後経過一年氷宇治

松下 俊之

金髪のリカちゃん人形夜店の灯

杉本 久子

夏草のほひ残して辞世の句

武居裕美子

後から自転車ノベル送り梅雨

木村 幸枝

◆青梅(7・12)

幸子報

まくなぎを払ふ力を悲しめり

新井たか志

風鈴の誘ふ音色に誘はれて

大塚 行人

◆鷹(7・7)

十五報

代田風水の匂ひに里ごころ

湯本とし子

せせらぎに鈴の音さやか登山杖

青木 孝子

白木槿陽は高々と野辺送る

加藤まり子

降水帶動かず煮梅つややかに

池田 令子

青田風今日も友とし畑仕事

久保寺トミ子

芭蕉葉に滴と在りけり雨蛙

西賀 久實

酒匂川鮎の瀬を追ふ竿さばき

田渕 令子

髪刈りし頭を掠めたり夏燕

佐宗 欣二

魚拓掛け島の飯屋や夏旺ん

須田 晴美

夕づくや掃き出し窓に吊る簾

片野 秋子

繁華街にぼつんと古跡白日傘

中田 笑子

地図を手に古き町並氷旗

小林 環

打球追ふ野手の太脛雲の峰

百川 秀子

御開きのダンスパーティー螢舞う

下平 美子

紫陽花やビデオの父の髪黒し

山崎美知子

万緑や弓振り絞る大鏡

鳥海 壮六

ラベル貼り行先決まる梅酒かな

柏木 良花

盆路や羽虫発ちたる草の先

古屋 徳男

緑陰や池に張出す能舞台

庄司 下載

ワニ園の静かに夏日溢れけり

村場 十五

スूपくつくつ蜘蛛と棲む森深し

瀬戸 りん

◆おほる(7・12)

秀泰報

沈沈と月山更くる夏炉かな

高橋久美子

蚊遣火の煙まっすぐたつ夜かな

小野 菊土

訃音あり暮れて代田のほの白し

中山智津子

友揃い古稀は十八歳鮎の膳

廣田 悦子

涼しさや名前を持たぬ岬馬

齊藤 桂

老いた妻素早い動き蠅叩く

中津川晴江

移り気なわれに水母の裏返る

芹澤 常子

雷鳥に出会い甲斐駒虹かかる

香川 花子

バイエルの進歩速き子夏休み

大木 敬子

梔子の香るポストに文託す

二上 光子

粒餡のぼたもち父の日なりけり

大島美恵子

昼寝覚め無垢な私になる一瞬

加藤 春江

進水のシャンパン割れて雲の峰

田下 昌人

半夏生心と体の声を聞く

石井千代子

くどくどと昔語りやビアガーデン

中根 和子

追憶にひと時ひたる縁端居

中村 昌男

早乙女の横一列の赤だすき

加藤 幾代

球児らに本当の夏応援歌

石井きよ子

少女らの膝裏清き夕立かな

高橋千代子

白妙の衣染めたや虹二重

横塚 昌平

雨粒に硫黄の臭ひ山法師

守屋 まち

丹沢の深き懐虹の橋

中根登美子

石蹴りのチョークの跡や夕焼空

米山 翠

虹立ちて雨の匂の微かな

高橋みどり

城跡のせせらぎ涸れる花菖蒲

來田 新子

虹の橋平和航路の懸橋に

史郎報

◆零(7・20)

秀泰

コンビニのスイーツでよし誕生日

牛蛙闇にまことの闇のあり

早よ帰ろ入道雲が追って来る

たわむれに蛇苳など如何です

振花や心のままに四才児

天辺は妖精の城雲の峰

夏の暁ガイドと巡る出羽三山

梅雨明けやムラサキ光るジャガランダ

◆草むら(7・19)

三伏の畑で迎ふる日の出かな

銀河へと往きて還らぬ仮眠かな

夏薊淋しさ隠し上向くや

◆無所属

鳥の点描大夕焼を引き連れて

うどん屋の猿のこしかけが飛びそう

静寂やことに青田の尾獣骨

夏袈裟の僧のすり足軽きかな

パーゴラの薔薇や貴族のやうな犬

さつぱりと入梅鯛炊かれをり

梅干して三日三晩の晴祈る

ギヤマンの匙すべらせて音こぼれ

青木たけを

伊藤 道郎

川合 昌子

木村 和彦

佐藤 正子

中村 裕子

野川木一路

岡本 史郎

重満報

石井 秀稀

佃 悦夫

佐々木重満

小林永以子

大石 雄介

大石 和子

一ノ瀬茂代

島 梅乃

出澤 洋子

木村美千代

山本 すみ

風鈴へ物足りなさの迷い風

振花や天に階段あるやうな

夕焼の校庭昏き給仕室

門灯の届かぬ先に百合白し

愚かなるかの戦いや青山河

昔話ぼつぼつ語る夏は嫌い

万能の五指を駆使して梅をもぐ

織姫彦星歩きスマホは禁止です

夕立来る風呂敷き繋ぎ画布くるむ

老鶯の艶コーヒーはブラックで

まだ消えぬ額の寝跡夏の月

反対は一人に限る蠅叩

弟は父似と言われ藍浴衣

日雷ゼウスは今日も女好き

岩楯惠津子

小澤 園子

須田 聡子

田畑ヒロ子

神野美代子

穂坂志げる

山田 照子

北村 文江

杉崎 せつ

杉山あけみ

岡田 典代

瀬戸 正洋

山口 千代

大佐田うづき

無所属会員の皆様へ

毎月の「俳句おだわら」の投句締切は毎月十九日です。折角の発表機会ですから積極的に投句されるようお待ちします。ハガキにて。

宛先 〒250-0042 小田原市荻窪549-17 村場十五宛

風間 秀泰

西瓜弦日増しに伸びる庭畑
先見えざる大社の茅の輪かな
真夏日に風の変わり目気持ちよし
エルニーニョこの先どうする夏の雨
新緑の山との対峙山彦が

内田知江子

噴水の自律神経乱れしか
サンドバック打てど動かぬ雲の峰
若竹のひとふし伸びる月夜かな
おっとりの母の育てし胡瓜かな
老鶯の恋の筒抜け森の黙

青山 典子

酔の加減胡瓜もみにも母の味
紫陽花の海より深き蒼の色
下町の路地を通れば夏のれん
入梅や歯車きしむ水車小屋
緑蔭にみな肩よせて始発バス

青木 孝子

打ち水や荒神祀る路地の屋根
帰省子の荷物の先に着きにけり
夏館柱時計の刻合はす
プリントに母国語のルビ夏期講座
並べある香水瓶の数の恋

無所属会員の皆様へ

毎月の「俳句おだわら」の投句締切は毎月十九日です。
折角の発表機会ですから積極的に投句されるようお待
ちします。ハガキにて。

宛先 〒250-0042 小田原市荻窪549-17 村場十五宛

清水美代子

線香の煙ひとすぢ片白草
紫蘇ジュース氷ころりと舌赤し
手を合はす地藏足もと梅ひとつ
タッチアンドゴー水面を叩く巢立鳥
振花の捲きまちがへて君目立つ

小林 環

佐渡かすむ茅花流しの朝の浜
地方紙を捲るロビーや朝涼し
仕舞屋に竹筒の花燕の子
草笛や坂道長き通学路
三姉妹遠く寄り来て墓洗ふ

小林永以子

左手に汲む清めの水やたかみそぎ
ひかりごと汲む一期一会のやま清水
梅雨居座つて日本列島水浸し
夏ダム湖地球の地軸狂はせ
夏の地球重し水の惑星

大石 和子

(令和5年6月号)

春蘭の森は母体の温みもつ

木村 和彦

木村さんの自然へのまなざしは、いつもあたたか
い。小さな生き物たちへ心を寄せる深い愛は母性と
呼んでもいい。森に母体の温みを感じるとき、木村
さんは森になり切っている。春蘭は華やぎのある言
葉だがひっそりと咲く緑色の地味な花だ。

俳句初心のころからお付き合いさせていただき、
俳句を自然を熱く語る先輩は今病床にあり切ない。
またいつかツタンカーメン豌豆の花を咲かせましょ

関戸わよ子

(令和5年 月号)

若葉山抜け来し鐘の音青し

田畑ヒロ子

鐘の音が青いと言いつ切った所が意表を突きました。
山奥の山寺から聞こえるいつもの鐘の音が、今日は
風も光も音も初夏の若葉に包まれ青(緑)に見えると
いう感覚ででしょうか。

山全体を望む大景も見え、昔このような光景を見
た事があるような懐かしい、爽やかな心持ちにもな
りました。写生を超え、五感の研ぎ澄まされた句だ
と思えました。

百川 秀子

(令和5年 月号)

焼売にチヨンと青豆春休

高橋久美子

近頃は皮の色カラフルで具も豪華な物が多くなっ
たが、この句の焼売は豚肉と玉葱の基本のチルド品
だ。美味しくて見映えがするし子供だけでもチンし
て食べられるので随分お世話になった。チヨンと置
かれた青豆は子供の嫌いな野菜の上位にくるそうだ
が、これなら大丈夫。健やかで主婦にとつても味方
の象徴の色だ。

城苑俳句・秋の部

(合同句集第十二集 43～59頁より近藤久江抄出)

明け方の風を座敷に盃蘭盆会

木村 幸枝

黄葉ひとつ犇めく鯉の中に落ち

久津間百合子

青葡萄風の流れを変えにけり

國島 五月

水澄むや心ゆくまで鎌を研ぐ

久保寺トミ子

梨を剥くコップの水の甘き色

小瀬村信子

紅白の萩の乱るる文学館

小林永以子

畑のある暮し素直やむかご飯

小林 環

師を称へちちを敬ひ秋彼岸

小宮 早苗

令和5年度小田原秋季俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「星月夜」「花野」(いずれも傍題可)各一句

一組 未発表作品に限る。

賞 小田原市長賞以下二十位、選者特選賞

第二部 俳句大会

日時 令和五年十月十五日(日)

会場 おだわら市民交流センター(通称UMECO)

受付 十一時 投句締切十二時

開会十二時半 終了十五時半(予定)

整理費 五百円(呈飲み物)

当日題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会長賞以下五十位

*お願い 会場では飲食可能です。

参加人数が多数見込まれますので、感染防止対策に

ご協力ください。

★当協会員で令和四年十月三日(令和4年度秋季俳句大会翌日)から五年十月十五日(秋季大会当日)に満年齢で還暦、古希、喜寿、傘寿、米寿、卒寿に達する寿齢者への恒例の表彰を行います。(表彰は投句条件)

〈主催〉小田原俳句協会 〈後援〉各地俳句協会

小田原俳句協会

〒二五〇〇〇二二 小田原市本町二一三一二

池田 忠山方

マンシヨンの住所長しよ秋桜
 山よりのひかりに濡れて蕎麦の花
 秋灯やルーペに正す文字ひとつ
 約束の消えし虚ろやカンナ咲く
 露草や秘めた想いの色になる
 色変えて誰を待つのか酔芙蓉
 青墨の香に心満つ今朝の秋
 稲の花出会い頭の恋に落つ
 夕日射す満天星もみぢ妬心なほ
 つげの櫛入れて梳くごと秋の滝
 過ぎし日の火照りを巻きて秋すだれ
 草陰に隠れ猫背の案山子かな
 邯鄲や割印著き契約書
 菊の香や街の小さな文化展
 敗戦の日やペンギンの速歩き
 深秋やつぎの水輪を待つ水面
 終戦日駅の待合室にをり
 秋晴やペランダに干す小座布団
 故郷は父母のふところ柿すだれ
 書架に立つ九月の雨の明るさよ
 三日月湖抱く湿原鳥渡る
 旅装解くわれに螻蛄鳴く蚯蚓鳴く

近藤 絢子
 近藤 久江
 西賀 久實
 齊藤 桂
 齊藤 静
 坂入清四郎
 坂元 一義
 佐々木重満
 佐宗 欣二
 佐藤 正子
 澤口 文子
 下澤 操子
 杉崎 せつ
 杉本 久子
 杉山あけみ
 須田 聡子
 須田 晴美
 関根 琉子
 瀬戸とみ子
 瀬戸 悠
 瀬戸 りん
 芹澤 常子